

ミカンハムグリガの集団防除試験

田中 学・井上晃一

(園芸試験場, 久留米支場)

TANAKA, M. and INOUE, K.

Group Control of the Citrus Leaf Miner, *Phyllocnistis citrella* Stainton

ミカン新植地帯は年々増加の一途をたどっているが、新植地の害虫防除で最も厄介なのはミカンハムグリガである。現在硫酸ニコチンの5~10日置き散布が行われているが、最近ニコチン不足で、薬価が著しく高騰していること、又5~10日毎の散布は農作業上大きな負担であり、この害虫の防除方法については、新たな観点から再検討する必要に迫られている。

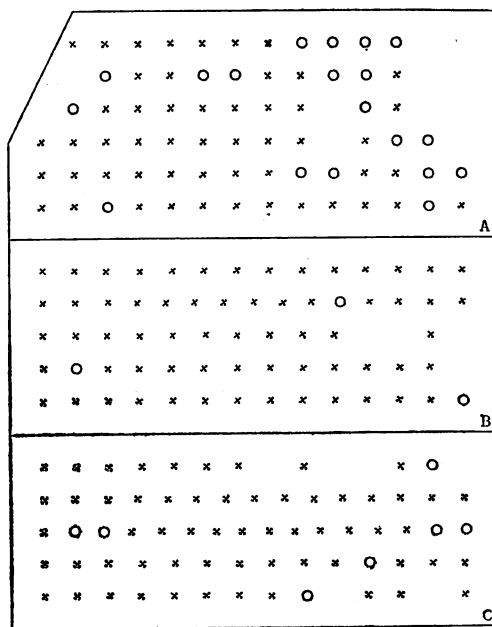
そこで、集団防除により、棲息密度を下げ、散布間隔を広げることは出来ないかどうかを検討した。

試験方法 スピード、スプレイヤ(SS-50)を用い、毎時2km, 3km, 4kmの速度で硫酸ニコチン800倍液を夫々1haの圃場に散布し、約10.0m×12.5mに1本の割合で、無被害新梢をマークし、加害の有無を調査した。7月29日に散布、8月1日に調べた。結果は第1図の通りである。

結果 第1図に見られるように初期の加害は周辺部から開始される。ここで散布量の多い2km区が被害が多いのは、棲息数の多い圃場が近接していたためと考えられる。3km区と4km区の間には、散布量による効果の差異が見られる。

考察 このことから次のようなことが考えられる。ミカンハムグリガの防除は、圃場の周辺からの侵入を防ぐことを考えるべきである。したがって集団防除を実施すれば、散布間隔を広げることができる。又集団地では、周辺部のみ、散布回数を増すことにより防除効率を高めることができるものと思われる。散布間隔は、ハムグリガの生息密度の高低によって決定す

第1図 散布後のミカンハムグリガ喰入幼虫の発生分布 (8月1日)



註) A: 硫酸ニコチン 2km/h
 B: " 3km/h
 C: " 4km/h
 ×: 健全枝
 ○: 被害枝 生存虫

べきであり、生息数が高いと防除は困難である。

したがって、初期防除を徹底し、生息数を増大しないように心がけるべきである。